

編集後記

『エジプト学研究第21号』をお届けします。早稲田大学のエジプト調査が開始されてから50年近くの歳月が経過しました。本年から50周年を記念して展示会などいくつかのイベントを計画しています。今年は第二次世界大戦が終了してから70年にあたっています。日本のエジプト学研究とりわけ、エジプトをフィールドとしたエジプト考古学研究的歴史は、まだまだ欧米の研究の歴史の長さと比較すれば短いものです。でも50年間、継続して調査研究をつづけていくことは容易なものではなかったと思います。最近の西アジア・北アフリカの政治情勢は極めて厳しいものがあります。シリアやイラクにおける「イスラーム国(ISIS)」の台頭に象徴されるように、これらの地域におけるフィールド調査は、実質的に不可能なものとなっています。エジプトの現状も予断を許しませんが、それでも2014年度も複数の調査を実施することができました。昨年の20号の編集後記にも記しましたが、エジプトと日本を結ぶエジプト航空の直行便もなくなり、日本からの観光客もほとんどない状態です。しかしながら、南部の有名な観光地であるルクソールでは、世界各国の調査隊が数多く集まり、大規模な発掘調査を実施しています。2014～15年冬のルクソール地域、特に西岸では、これまで外国人観光客に依存していたものが、外国調査隊に肩代わりしたかのような状況でした。今後のことを予測することはできませんが、これからもエジプトで調査が継続できることを切に祈っています。

さて、本号では、調査報告としてギザの大ピラミッド南側のクフ王の第2の船坑で継続して実施している「太陽の船プロジェクト」の活動報告と2007年以来、ルクソール西岸のアル＝コーカ地区で継続調査をしている「第7次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」の2本、そして、特別寄稿として「年輪年代学とエジプト学」がある。この著者のひとりであるピアース・ポール・クリスマン氏は、アリゾナ大学年輪年代学研究所の若き研究者で、現在、アリゾナ大学エジプト調査隊長も務めておられ、昨年夏に来日され、第3回太陽の船シンポジウムで“Maritime Archaeology and Ancient Egypt (海事考古学と古代エジプト)”と題して講演していただいた。

また研究ノートとして、本学文学部考古学コース4年生(2015年度から大学院文学研究科修士課程に進学)の山崎世理愛さんの論考を掲載することができた。今後の研究の進展が楽しみです。学部生の研究ノートを掲載できたことは大変に喜ばしいことではあるが、これ以外の若手の論文・研究ノート等を掲載できなかったことは大いに悔いが残る結果となってしまいました。次号には多くの論文・研究ノートの投稿を期待しています。

最後になりましたが、今年も本号の編集には、河合 望・馬場匡浩両氏に大変お世話になりました。明記して感謝します。

2015年3月末日

近藤 二郎

早稲田大学文学学術院教授

早稲田大学エジプト学研究所所長